

<一般研究>

保健指導の効果に関する研究

— 幼児の発達と環境 —

研究第7部
共同研究者

高橋 種 昭

石 島 央 子 (東京大学母子保健学教室)

研究目的

幼児の心身の発達にとって、その養育環境が非常な力を発揮することについては今更述べる必要もなからう。

しかし、その養育環境そのものは、社会の変動に伴い常に大きく変化するものである。地域社会環境をはじめとして、家庭環境や集団生活環境など、幼児をとりまく環境の変化は、最近とみに著しいものがある。

保健指導の場において、実際に幼児の保健指導にあたる人々が、もしも、そうした養育環境の実態や、その影響が如何なるものであるかを知らずに指導に当ることがあれば、指導効果に対する期待も著しく減殺されるであろう。

今回の研究は、現在の幼児の養育環境の実態を明らかにすると共に、環境条件の違いが幼児の心身の発達にどのような影響を与えているかを明らかにし、保健指導の効果増進の一助となることを願って行ったものである。

研究方法

昭和55年度に日本小児保健協会の手によって、全国的規模の幼児健康度調査が実施され、その結果については既に発表されている。全国的規模でなされた極めて信頼度の高いこの種の調査は極めて少なく、その資料も貴重なものである。今回はその資料の一部をかり、目的で述べたような事実の究明のため、環境的要因と発達との関連をみるのに必要な分析を実施し、考察を行った。

幼児健康度調査は、同時に行われは厚生省の乳幼児発育調査の対象となる昭和50年度国勢調査地区内の3,000地区内の1歳児及び、3,000地区内より更に抽出した750地区内の2歳以上で小学校就学前の幼児を対象にして行われた調査である。調査票の内容は、家族、地域、住居などに関する詳細なフェースシート部分と、32項目の健康

に関する質問項目と、発達に関する13項目からなり、配布は直接保護者に交付し、記入後、健診の場に持参させる方法をとった。対象となった幼児の総数は15,045名である。

1 環境と養育者

環境と発達との関連をみる前に、地域環境や住居環境により、子どもの昼間の養育者がどのように異っているかをみたのが表1～表3である。何故なら、そうした物理、自然的環境や社会環境と子どもとの間には、養育者の存在が常に介在すると考えられるからである。

表1-(1) 養育者と地域 (1歳～1歳6ヶ月)

養育者 地域	母	祖母	保育所等	その他	不明	計
指定都市 + 23区	574 (87.5)	18 (2.8)	41 (6.4)	5 (0.8)	3 (0.5)	641 (100.0)
その他 市	1,554 (81.5)	211 (11.1)	94 (4.9)	32 (1.7)	15 (0.8)	1,906 (100.0)
町 村	541 (71.0)	165 (21.7)	25 (3.3)	22 (2.9)	9 (1.2)	762 (100.0)
計	2,669 (80.7)	394 (11.9)	160 (4.8)	59 (1.8)	27 (0.8)	3,309 (100.0)

表1-(2) 養育者と地域 (5歳)

養育者 地域	母	祖母	保育所等	その他	不明	計
指定都市 + 23区	228 (58.9)	7 (1.8)	148 (38.2)	3 (0.8)	1 (0.3)	387 (100.0)
その他 市	381 (38.1)	43 (4.3)	535 (53.6)	35 (3.5)	5 (0.5)	799 (100.0)
町 村	113 (27.8)	36 (8.9)	248 (61.1)	6 (1.5)	3 (0.7)	406 (100.0)
計	722 (40.3)	86 (4.8)	931 (52.0)	44 (2.5)	9 (0.5)	1,792 (100.0)

表1(1)～(2)に示すように、昼間の養育者は、地域によってかなりの違いがみられる。町村地区では子どもが1歳の段階では祖母を昼間の養育者とするものが、多くみられるが、5歳になると、保育所など母を昼間の養育者

とするものが最も多くみられるようになる。

次に、地域環境によって養育者の違いについてみると、表2(1)～(2)に示すように、全体としては祖母を養育者とするものが農村、漁村地区に多くみられるし、保育所は商業地区に多くみられ、住宅地区などでは少ない。しかしこの場合、年齢による差が大きく、1歳前半では、保育所をあげるものは各地区とも少なく、祖母とするものが農村、漁村地区に目立って多い。しかし、5歳では各地域とも保育所の占める割合は非常に多くなり、約半数のものが保育所などの保母を昼間の養育者にあげている。

表2-(1) 養育者と地域環境 (1歳～1歳6ヶ月)

養育者 地域環境	母	祖母	保育所等	その他	不明	計
住宅地域	1,939 (85.7)	159 (7.0)	112 (4.9)	35 (1.5)	18 (0.8)	2,263 (100.0)
商業地域	141 (77.9)	17 (9.4)	18 (9.9)	4 (2.2)	1 (0.6)	181 (100.0)
工業地域	51 (82.3)	1 (1.6)	9 (14.5)	1 (1.1)	0 (0.0)	62 (100.0)
農村地域	506 (67.0)	206 (27.3)	18 (2.4)	18 (2.4)	7 (0.9)	755 (100.0)
漁村地域	19 (61.3)	9 (29.0)	1 (3.2)	1 (3.2)	1 (3.2)	31 (100.0)
その他の地域	7 (63.6)	2 (18.2)	2 (18.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	11 (100.0)
不明	6 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	6 (100.0)
計	2,669 (80.7)	394 (11.9)	160 (4.8)	59 (1.8)	27 (0.8)	3,309 (100.0)

表2-(2) 養育者と地域環境 (5歳)

養育者 地域環境	母	祖母	保育所等	その他	不明	計
住宅地域	562 (44.0)	34 (2.7)	633 (49.6)	42 (3.3)	6 (0.5)	1,277 (100.0)
商業地域	41 (37.6)	5 (4.6)	61 (56.0)	2 (1.8)	0 (0.0)	109 (100.0)
工業地域	10 (52.6)	0 (0.0)	9 (47.4)	0 (0.0)	0 (0.0)	19 (100.0)
農村地域	103 (28.1)	45 (12.3)	215 (58.7)	0 (0.0)	0 (0.8)	366 (100.0)
漁村地域	2 (40.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (100.0)
その他の地域	4 (25.0)	1 (6.3)	11 (68.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	16 (100.0)
不明	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (100.0)
計	722 (40.3)	86 (4.8)	931 (52.0)	44 (2.5)	9 (0.5)	1,792 (100.0)

住居の種類別に昼間の養育者をみると、表3(1)～(2)にみられるように、一戸建の住居に住む子どもに祖母を養

育者とするものが多くみられる。その他5歳児では、どの住居形態の場合も、保育所の保母を昼間の養育者とするものが約50%前後みられるが、マンション居住者の場合だけは母親を養育者とするものが圧倒的に多く、保育所は他に して著しく少なく、3割に足りない数である。

表3-(1) 養育者と住宅種類 (1歳～1歳6ヶ月)

養育者 住宅種類	母	祖母	保育所等	その他	不明	計
一戸建	1,595 (75.7)	355 (16.8)	94 (4.5)	43 (2.0)	20 (0.9)	2,107 (100.0)
マンション	205 (89.9)	9 (3.9)	11 (4.8)	3 (1.3)	0 (0.0)	228 (100.0)
団地	424 (72.4)	13 (2.8)	17 (3.7)	5 (1.1)	0 (0.0)	459 (100.0)
アパート	339 (87.1)	8 (2.1)	33 (8.5)	5 (1.3)	4 (1.0)	389 (100.0)
間借り	20 (83.3)	2 (8.3)	1 (4.2)	1 (4.2)	0 (0.0)	24 (100.0)
その他	78 (83.0)	7 (7.4)	4 (4.3)	2 (2.1)	3 (3.2)	94 (100.0)
不明	8 (100.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	8 (100.0)
計	2,669 (80.7)	394 (11.9)	160 (4.8)	59 (1.8)	27 (0.8)	3,309 (100.0)

表3-(2) 養育者と住宅種類 (5歳)

養育者 住宅種類	母	祖母	保育所等	その他	不明	計
一戸建	434 (35.4)	79 (6.4)	678 (55.3)	28 (2.3)	7 (0.6)	1,226 (100.0)
マンション	86 (69.9)	2 (1.6)	34 (27.6)	1 (0.8)	0 (0.0)	123 (100.0)
団地	102 (48.3)	2 (0.9)	103 (48.8)	3 (1.4)	1 (0.5)	211 (100.0)
アパート	72 (43.9)	2 (1.2)	79 (48.2)	10 (6.1)	1 (0.6)	164 (100.0)
間借り	8 (47.1)	0 (0.0)	9 (52.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	45 (100.0)
その他	20 (44.4)	0 (0.0)	25 (55.6)	0 (0.0)	0 (0.0)	45 (100.0)
不明	0 (0.0)	1 (16.7)	3 (50.0)	2 (33.3)	0 (0.0)	6 (100.0)
計	722 (40.3)	86 (4.8)	931 (52.0)	44 (2.5)	9 (0.5)	1,792 (100.0)

このように、昼間の養育者には、その生活環境を異にするに伴い、大きな違いがみられるので、いたずらに外的、物理的環境条件にばかり目を奪われることなく、同時に、こうした条件の違いとのからみ合いの中で、子どもの発達に対する影響力についても考えていく必要があるわけである。

2 環境要因と発達との関連

幼児の心身の発達に影響をもつと考えられる環境要因については、多くのものが考えられるが、今回は次の四つの要因について発達との関連をみた。

- ① 地域
- ② 地域環境
- ③ 昼間の養育者
- ④ 同胞関係（同胞数、同胞順位）

①については、東京23区、政令都市、その他の市町村の3種類、②の地域環境については、農村、漁村、商業、工業、住宅、その他の6地域、③の昼間の養育者の場合は、母親、祖母、保育所等、その他の4種類に分類して発達との関連をみた。

1. 地域について

大都市、都市、町村の3種類の地域によって、子どもの発達に有意差が認められたものは、次の7項目である。

(※5% > P, ※※1% > P)

2歳児 No.5

「同じくらの子どもと一諸にいて遊ぶことを喜びますか」

表4 地域

地域	答	はい	いいえ	わからない	計
指定都市+東京区部		285 (89.6)	26 (8.2)	7 (2.2)	318 (100.0)
町村		265 (83.6)	46 (14.5)	6 (1.9)	317 (100.0)

3歳児 No.3

「約束したことや順番を守ることができるようになりましたか」

表5 地域

地域	答	はい	いいえ	わからない	計
指定都市+(1)東京区部		252 (81.3)	33 (10.6)	25 (8.1)	310 (100.0)
その他の市(2)		633 (71.6)	141 (16.0)	110 (12.4)	884 (100.0)
町村(3)		206 (62.4)	68 (20.6)	56 (17.0)	330 (100.0)

(1)-(2)※※ (1)-(3)※※

4歳児 No.2

「友達とお母さん役、運転士などの役割をもったごっこ遊びをしていますか」

表6 地域

地域	答	はい	いいえ	わからない	計
指定都市+東京区部		301 (90.1)	19 (5.7)	14 (4.2)	334 (100.0)
町村		313 (80.9)	43 (11.1)	31 (8.0)	387 (100.0)

※※

4歳児 No.8

「近所のよく知っている所なら簡単なお使いができますか」

5歳児 No.6

「外から帰ってきてお母さんなどがいないと心配したり、泣きべそをかいたりしますか」

表7 地域

地域	答	はい	いいえ	わからない	計
指定都市+東京区部+その他の市		628 (45.9)	656 (47.9)	85 (6.2)	1,369 (100.0)
町村		163 (40.6)	226 (56.4)	12 (3.0)	401 (100.0)

※※

6歳児 No.6

「外から帰ってきてお母さんなどがいないと心配したり泣きべそをかいたりしますか」

表8 地域

地域	答	はい	いいえ	わからない	計
指定都市+東京区部		81 (42.2)	97 (50.5)	14 (7.3)	192 (100.0)
町村		65 (32.5)	133 (66.5)	2 (1.0)	200 (100.0)

※※

6歳児 No.5

「おもちゃやお菓子などがほしくてもがまんすることができるようになりましたか」

6歳児 No.13

「ひもでかた結びができますか」

以上、差のみられた7項目を発達の領域別に分けると次の如くなる。

社会性に関した項目 4.

情緒に関した項目 2.

運動に関した項目 1.

社会性の発達に地域差が大なることは最初から予想されたが、やはり他の地域に比して多くの項目に差がみられた。2歳児の同年令の子どもと遊ぶことを喜び子ども

が、町村地区より東京23区や指定都市に多いのは、そうした地域では、低年齢幼児でも集団保育の場などで同年令の子どもと遊ぶ機会が多いためと考えられるし、3歳児に約束や順番を守る子どもが、同じように東京23区や指定都市に多いのも、3歳の段階での集団生活経験の豊かさを示すものといえよう。4歳児で近所へのお使いに行く子どもが大都市に多いのは、大都市の生活状況を考えれば当然と考えられ、辺ぴな農村では、そうしたお使用は、4歳児には到底無理な要求とも考えられる。

情緒に関する項目2つについては、外出からわが家に帰った際、母親などが不在で泣く子どもが、町村地区より東京23区や指定都市に多いのは、現在の大都市の生活を考えれば、これ又当然ともいえる。現在の大都市の生活では、それぞれの家が孤立すると同時に、核家族が多いので、親の不在は、子どもの完全な孤立を意味するのである。つまり、この結果は現在の都市生活の不安な生活を反映したものともいえる。

運動に関する項目では、常に農村地区の子どもの方が指先の動きなどがよいといわれているが、今回の調査結果をみても、ひもなどを結ぶことが大都市の子どもに比べて農村地区の子どもは上手である。

2. 地域環境について

地域環境について差のみられたのは、次の4項目である。

3歳児 No.3

「約束したことや順番を守ることができるようになりましたか」

5歳児 No.6

「外から帰って来てお母さんなどがいないと心配したり泣きべそをかいたりしますか」

表9 地域環境

答 地域環境	はい	いいえ	わからない	計
住宅地域	589 (46.7)	595 (47.1)	78 (6.2)	1,262 (100.0)
農村地域	139 (38.5)	208 (57.6)	14 (3.9)	361 (100.0)

※※

6歳児 No.3

「友達などのルール違反をいけいんだよ、などと注意しますか」

6歳児 No.5

「おもちゃやお菓子などがほしくともがまんすることができるようになりましたか」

表10 地域環境

地域環境 \ 答	はい	いいえ	わからない	計
住宅地域	544 (85.1)	80 (12.5)	15 (2.3)	639 (100.0)
農村地域	156 (76.1)	38 (18.5)	11 (5.4)	205 (100.0)

※※

以上の4項目の内容は、領域別にみると、

社会性に関する項目 2

情緒に関する項目 2

となり、社会性と情緒に関する項目に限られている。

社会性に関する項目の内容をみると、3歳児の約束や順番を守ることができるという項目と、6歳児の友達などのルール違反を注意する、という項目であり、両方の項目とも住宅地区の子どもの方が農村地区の子どもより、そうした社会ルールを多くの子どもが早くから守っている結果が出ている。

情緒に関する項目については、母親の不在に際して泣きべそをかく子どもが住宅地区に多いが、同時に、玩具や菓子をはがまんすることも、住宅地区の子どもの方が多いという結果が出ている。この場合、住宅地区の子どもに孤立への不安が強いことは、既に地域性のところでも述べたように、不安の多い現在の都市生活の反映と考えられるが、がまんできる子どもが住宅地区に多いことについては、しつけの相違によるものか、集団保育の場での豊かな生活経験の影響か、限られた今回の調査結果だけでははっきりした結論を出すことはできない。

3. 屋間の養育者について

屋間の養育者を異にするに伴い、子どもの発達に変化がみられる、ということについては、そのもののもつ影響力の大なることを考えれば当然ともいえるが、今回の調査では、次の6項目について有意の差がみられた。

1歳前半 No.4

「犬や自動車など知っているものを指さしておしえることがありますか」

1歳前半 No.13

「階段をひとりではのぼることができますか」

2歳児 No.5

「同じくらの子どもと一緒にいて遊ぶことを喜びま

表 11 屋間の保育者

保育者	答	はい	いいえ	わからない	計
祖母		141 (82.0)	28 (16.3)	3 (1.7)	172 (100.0)
保育所等		158 (92.9)	11 (6.5)	1 (0.6)	170 (100.0)

**

3歳児 No.10

「でんぐり返しができますか」

表 12 屋間の保育者

保育者	答	はい	いいえ	わからない	計
祖母		113 (77.4)	26 (17.8)	7 (4.8)	146 (100.0)
保育所等		338 (93.4)	15 (4.1)	9 (2.5)	362 (100.0)

**

5歳児 No.6

「外から帰ってきて、お母さんなどがいないと心配したり泣きべそをかいたりしますか」

表 13 屋間の保育者

保育者	答	はい	いいえ	わからない	計
祖母		394 (49.4)	357 (44.8)	46 (5.8)	797 (100.0)
保育所等		370 (40.2)	500 (54.3)	50 (5.4)	920 (100.0)

**

6歳児 No.5

「おもちゃやお菓子などがほしくともがまんすることができるようになりましたか」

以上の項目を領域別に分けると次の如くなる。

運動能力に関する項目 2

情緒に関する項目 2

社会性に関する項目 1

知的能力に関する項目 1

運動能力に関する項目についてみると、「1歳前半の段階のばかりができる子どもは、母親を養育者とする子どもより保育所の子どもに多くみられ、3歳の段階では、でんぐり返しの運動が、この場合も祖母を養育者とする子どもより保育所の子どもの方が多くできていた。

情緒に関する項目では、母親不在の際に泣いたりする子どもが、5歳児の段階で保育所の子どもに少ないが、玩具やお菓子をほしくともがまんする子どもについては、6歳児で保育所の子どもの方が、母親を養育者とする子どもよりがまんできる子どもが少なくなっており、集団生活を常に経験している保育所の子どもが必ずしもがま

ん強くないという結果が出ている。

社会性の項目に関しては、2歳児の段階で、同年齢の子どもと遊ぶことを喜ぶ子どもが、祖母を屋間の養育者とする子どもより保育所の子どもに多くみられたが、これはその生活からみてもごく当然といえよう。

知的能力に関する項目については、もっと多くの項目に有意の差が期待されたが、差がみられたのはわずかに犬や自動車などを1歳前半の子どもが指さして声を出して教えるという1項目のみであった。そして、祖母を養育者とする子どもの方が母親を養育者とする子どもよりよい結果がみられた。

4. 同胞について

イ. 同胞数

同胞数によって発達状況に差のみられた項目は、次の5項目である。

1歳前半 No.6

「音楽の音に合わせて体を動かしますか」

1歳前半 No.11

「コップを自分で持って飲めるようになりましたか」

表 14 同胞数

同胞数	答	はい	いいえ	わからない	計
なし (ひとりっ子)		896 (86.6)	121 (11.7)	18 (1.7)	1,035 (100.0)
あり		1,543 (89.9)	155 (9.0)	18 (1.0)	1,716 (100.0)

**

1歳後半 No.1

「絵本を見て「ワンワンはどれ、などと知っているものをきくと指さしますか」

4歳児 No.8

「近所のよく知っている所なら簡単なお使いができますか」

表 15 同胞数

同胞数	答	はい	いいえ	わからない	計
なし (ひとりっ子)		114 (66.7)	33 (19.3)	24 (14.0)	171 (100.0)
2人		333 (81.4)	47 (11.5)	29 (7.1)	409 (100.0)

**

6歳児 No.6

「外から帰ってきてお母さんなどがいないと心配したり泣きべそをかいたりしますか」

表 16 同胞数

同胞数	答	はい	いいえ	わからない	計
1 人		233 (41.4)	306 (54.4)	24 (4.3)	563 (100.0)
2 人		80 (30.7)	169 (64.8)	12 (4.6)	261 (100.0)

※

以上の5項目の内容は次の如くである。

知的能力に関した項目 2

社会性に関した項目 1

運動能力に関した項目 1

情緒に関した項目 1

知的能力に関した項目では、1歳前半の音楽にあわせて体を動かすという項目の場合も、1歳後半の絵本をみて知っているものを指さすという項目も、同胞のいないひとりっ子がよい結果を示している。ということは、ひとりっ子のように手をかけてもらえる環境が、こうした好ましい結果を生んでいるわけである。

社会性に関した項目では、近所へのお使いに関した項目が4歳段階にあるが、この場合は、やはり同胞数の多い方がよい結果を示している。

運動能力に関した1歳前半の、コップでひとりで飲むという項目については、同胞のある子どもの方がひとりで飲める子どもが多い。

情緒に関した項目では、外から帰ってきて、母親不在を知って泣く、という子どもが同胞数の少ない子どもに多い傾向がみられた。

ロ. 同胞順位

同胞の順位によって差のみられた項目は、次の3項目である。

4歳児 No.8

「近所をよく知った所なら簡単なお使いができますか」

表 17 同胞順位

同胞順位	答	はい	いいえ	わからない	計
第 1 子		514 (72.4)	113 (15.9)	83 (11.7)	710 (100.0)
第 3 子		170 (82.5)	23 (11.2)	13 (6.3)	206 (100.0)

※

5歳児 No.6

「外から帰ってきてお母さんなどがいないと心配したり泣きべそをかいたりしますか」

表 18 同胞順位

同胞順位	答	はい	いいえ	わからない	計
第 1 子 (1)		396 (49.9)	347 (43.8)	50 (6.3)	793 (100.0)
第 2 子 (2)		308 (41.0)	404 (53.8)	39 (5.2)	751 (100.0)
第 3 子 (3)		76 (39.0)	111 (56.9)	8 (4.1)	195 (100.0)

1-2※ 1-3※

6歳児 No.6

「外から帰ってきてお母さんなどがいないと心配したり泣きべそをかいたりしますか」

表 19 同胞順位

同胞順位	答	はい	いいえ	わからない	計
第 1 子 (1)		166 (44.0)	193 (51.2)	18 (4.8)	377 (100.0)
第 2 子 (2)		135 (33.9)	246 (61.8)	17 (4.3)	398 (100.0)
第 3 子 (3)		35 (27.6)	85 (66.9)	7 (5.5)	127 (100.0)

1-2※ 1-3※※

6歳児 No.1

「自分の経験したことを思い出して絵にかきますか」

以上の3項目の内容は、社会性に関した項目、情緒に関した項目、知的能力に関した項目、それぞれ1項目ずつである。

社会性に関した項目で、4歳児の近所へのお使いは、第1子と第3子の間に有意の差がみられ、第3子の方が多くお使いに行っている。

情緒に関した項目では、母親不在を知って泣きべそをかく子どもは、5歳児、6歳児ともに第2子、第3子より第1子に多くみられ、長子の「弱さ」が示されている。

知的能力に関した6歳児の項目では、第1子が第3子などよりよい結果を示している。

以上の結果からも、同胞数や順位は、子どもの発達にかなりの影響力をもっていることがわかる。ということは、親の養育態度も子どもの同胞順位や数によって異なり、子ども自身の生活経験の内容にも違いが生じていることの証拠であろう。ひとりっ子や長子は、幼児期では知的能力においてよいが、やはり線が細く、同胞のいる子どもに比べれば「弱い」感じである。

3 まとめ

イ. 知的能力について

今回の調査結果から、子どもの知的能力と環境との関連について考察すると、その特徴は地域差のようなものには差がみられず、差がみられた殆んどは項目は養育者や同胞に関したものであった。

つまり、子どもの知的能力に影響をもつと考えられる環境要因は、やはり物理的要因より人的要因といえる。このことは、人とかかわりの中で幼児の能力が伸ばされることを如実に示したものである。ことばにしても、表現能力にしても、すべて人との相互的な関係の中で育つものであることを再確認したのが今回の調査結果といえよう。

ロ. 社会性について

社会性の発達に関しては、特に3歳以降の年長幼児の場合、地域環境というものが大きく影響していた。3歳未満児のように家の中での生活が多い時期と異なり、家庭外での友達遊びなどが多くなると、養育者や同胞との関係より、やはり地域の子どもの関係がどのような状態にあるかということが最も重要な意味をもってくるわけである。また、幼稚園や保育所のような集団生活も当然大きな影響力をもっていると考えられるが、今回の調査結果からは、以上のような地域社会環境の影響が特に目立っていたといえる。

ハ. 運動能力について

運動能力の場合、当然のこととして地域差が大きく表われることが予想されたが、結果は6歳児のひも結びの項目に、大都市と農村との間に差がみられただけであった。他は養育者や同胞に関したもので、養育態度や同胞も同士の生活の影響の方が強くみられたわけである。

ニ. 情緒について

情緒に関した項目で環境の差がみられたのは、5、6歳児の帰宅時の母親不在に示す不安の強さと、玩具や菓子をはがまんするという2項目であり、前者の項目については、地域環境、同胞関係などが影響力をもち、後者の

場合は、養育者と地域による差がみられた。しかし、今回の調査項目の場合、情緒に関した項目が少ないこともあり、この2項目の差だけから影響力の強さを云々することは困難であるが、地域環境や家庭環境の差が子どもの情緒発達に影響をもつことが、限られた今回の結果からも充分に考えられた。

おわりに

以上の結果の如く、今回行われた多くの発達に関した調査項目の中で、社会環境や家庭環境によって明らかに差がみられた項目は、決して多数ではなかったわけである。この結果については、わが国の社会環境や家庭環境そのものが画一化、等質化し、過去にみられたような大きな文化差や地域差が消滅しつつあることによるとも考えられるし、今回の調査項目の多くが、通過率80%~90%という高いものであったため、細かい差がとらえられなかったためとも考えられる。今回は残念ながら行えなかったが、資料を更に細かく分析し、要因相互間の関連についてより細かい分析を行えば、今回差のみられた項目の背景についても、より多くの事実なり、関係について明らかにすることが可能かもしれないので、今後も引き続き、よりくわしい分析を進めてゆく予定である。

いずれにしても、保健指導の場においては、幼児をとりにくく環境条件に常に留意し、発達なり、問題についても、環境条件とのかかわりの中で力動的に考えていくことが必要であり、今回の調査研究の結果がその一助にでもなれば幸いである。なお今回の研究にあたって多くの便宜と協力を戴いた東京大学医学部平山宗宏教授、小林臻助手に深甚の謝意を表したい。

< 註 >

- (1) 幼児健康度調査、日本小児保健協会、昭和55年